



名古屋ハリストス正教会

なごや「聖歌」だより4月号2013

今月の予定

聖歌練習 半田 都合によりお休み

名古屋3月14日代式後 復活祭練習。

名古屋指揮当番

7日エレナ広石 21日ピーメン松島 28日マリア松島

伝統って何？

* 正教礼拝の伝統を考える



復活祭と日曜日2

さて3世紀になると主の受難と復活が分割して祝われるようになり、主の受難は一週間の受難週の儀式へと拡大しました。受難週の祭礼はエルサレムで発展しました。亜徒聖コンスタンティヌス一世の母、皇太后エレナは十字架刑の場所とイイススの収められた墓の跡を発見し、ヴィーナス神殿のあった場所にマルティリウム(殉教者)大聖堂、その近くのイイスス墓の跡にアナスタシス(復活)聖堂を建てました。その他にも主の受難ゆかりの各所、ベタニア、オリーブ山、シオン山、ゲッセマネなどにも聖堂が建てられ、ゆかりの場所を巡って受難週の礼拝を行う習慣ができました。行列を作ってアンティフォンやレスポンソリアルで聖歌を歌いながら行進しました。その様子はスペインの修道女『エゲリアの巡礼記』(太田強正訳、サンパウロ)に詳しく記されています。エゲリアは384年から387年にエジプトからパレスティナを旅行し、384年の大斎、受難週、復活祭をエルサレムで過ごしました。エゲリアのような巡礼者の報告を聞いた他の地域でもエルサレムを模した受難週礼拝が広まったことがわかります。

復活祭の徹夜祈は前の日の晩から始まり、旧約の預言書(現在は15カ所)が読まれる間に別棟の洗礼堂で洗礼式が行われました。洗礼と傅膏(堅信礼)を受けた「光照者 φωτισόμενος」(受洗者)は真白い衣を着て、31聖詠(32詩編)を歌いながら主教に率いられて聖体礼儀の行われる主聖堂に入ります。待ち受ける信徒たちが新しい仲間を歓迎して歌ったのが、今も洗礼式で歌われる「ハリストスによって洗を受けし者、ハリストスを衣たり、アリルイヤ(洗礼を受けてキリストに結ばれたあなた方は皆、キリストを着ている)(ガラテア3:27)」です。後にキリスト教公認によって受洗者が増え、洗礼日はラザリのスポタ(聖枝祭前日ラザロの復活を記憶する)や五旬祭に拡大され、降誕祭、神現祭も追加されました。ですから今でも、これらの日の聖体礼儀

では通常の「聖なる神」に代えて「ハリストスによって洗を受けし者・・・」が歌われます。

復活の事実は四福音書すべてに書かれていますが、十字架上で死んだイイススを墓に収めた後、女たちが空っぽの墓を見つけるまでの時間について福音書は沈黙しています。西方の聖画では、復活は墓の上にすくと立つキリスト像が単独で描かれますが、正教会の復活のイコンは「空の墓で携香女に復活を告げる天使」あるいは「主の陰府降り」の二種類で、復活そのものを描いたものはありません。「携香女と天使」のイコンは三日目の朝、没薬を持って墓に出かけた女弟子たちが天使に出会い主の復活を告げられる聖書の場面そのまま、応答歌(イパコイ)などの聖歌でも歌われます。

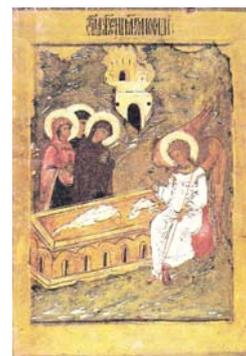
ハリストス死より復活し、死を以て死を滅ぼし、墓にあるものに生命を賜えり。(パシハのトロパリ)

死せざるハリストス神よ、爾は墓に降れども地獄の力を破り、勝つ者として復活せり、携香女(けいこうじょ)に慶べよと言ひ、爾の使徒に平安を与え、亡びし者に復活を賜えり。(コンダク)

王及び主よ、爾は身にて死者の如く寝(い)寝ねて、三日目に復活し、アダムを腐敗より起し、死を虚しくせり、不朽の「パシハ」、世の救いなり。(エクサポステイラリ)



西方の復活の聖画



正教会の復活のイコン

左:携香女と天使、右:主の陰府降り



ロシア語で祈祷文に音楽をつけることを「翻訳ペレヴォード」といいます。ただの音楽付けではなく、奉神礼で用いられる聖歌という言語に翻訳します。セルゲイ神父は長年「英語」の聖歌に携わってきた方です。そのエッセイから「翻訳」の妙技を学びます。

3. 何かのイミテーションではありません。

教会の聖歌は天使や鐘の音のイメージを模したBGMではありません。聖歌は「教会自身の呼びかけ」です。「翻訳」とは音楽、時、「ことば」によって提示される様々な「印象」を正しく歌にすることです。ロマン派の影響を受けた作曲家は、美学的な翻訳をしてうっとりするような甘い表現をしたい誘惑にひきずられますが、それは意識的に避けなければなりません。一度ならず、優れたレーゲントが女声に「天使のように歌って」というのを聞きました。また男声に「鐘の響きのように歌いなさい」というのを聞きました。聖歌隊は教会の聖歌隊らしく歌えばいいのです。音楽性を成長させるのは大変な仕事です。

4. 教会音楽では、ことばとメロディは不可分です。一方を主、もうひとつを従におくことはできません。

ことばとメロディの完全な結婚は「礼拝の貴いスピーチ」を生みます。歴史上、しばしば一方が他方を奴隷にしてしまった時代がありました。いかに音楽が美しくても、ことばを奴隷にしていることに疑問を掲

げる勇気をもたねばなりません。スラブ語やギリシア語の聖歌の音楽を英語に翻訳して歌う場合、スラブ語っぽい英語やギリシア語っぽい英語ではなくて、言語の違いを理解して、英語らしく歌いましょう。ことばをメロディラインに無理におしこめたり、力づくで文に当てはめたりしてはなりません。「ことば」と「音楽」双方が完全さを保ちつつ、ことばの並立やメロディの定型を考慮し、句、行、節、ストロフ(連)などにおいて、ことばのまとまりとメロディそれぞれの思想を明解に保ち、どちらかを隷属させるのではなく、互いが補足し合って、双方の完全さを保たねばなりません。それが高度な翻訳のわざです。

メロディにもことばにも、それぞれ思考の進んでゆく文脈の単位があります。メロディとことばが調和のとれた一体のものとなるように、レガート、強勢、ブレス、ヴォイスコントロールを行います。ことばの抑揚と、メディアントやカデンツァなどのメロディの性質を理解し、ことばを無理矢理音楽に詰め込まないことです。優れたレーゲントは充分時間をかけてメロディとことばの流れをブレンドする道を探します。

参考資料 聖歌の工夫の例、正教会の伝統から考える 会衆唱 2

正教会の古い伝統の中でも、復活祭を中心として大斎から五旬祭に至る季節には最も古い伝統が受け継がれています。パスハのトロバリ「ハリストス死より復活し…」もそのひとつです。まずソロが3回歌って、手本を示し、会衆が唱和します。ソロは67聖詠「神は興き」を一句ごと歌い、参加者は「ハリストス死より復活し」を何度も繰り返します。4世紀ごろからの伝統です。



名古屋では各国語、各国のメロディで歌います。日本語、ギリシア語でビザンティンのメロディ、スラブ語でロシア、ブルガリア、セルビアのメロディ、ルーマニア語、グルジア語、アラビア語など

で歌い、各国から来た信徒を巻き込んで歌います。主の復活の喜びが世界に伝えられ各国のことばで讃美されてきた正教の伝統です。各国のトロバリは以下のサイトにあります。

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy/siryou/index.html>
(下の方にスクロールしてください)



ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>
詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料